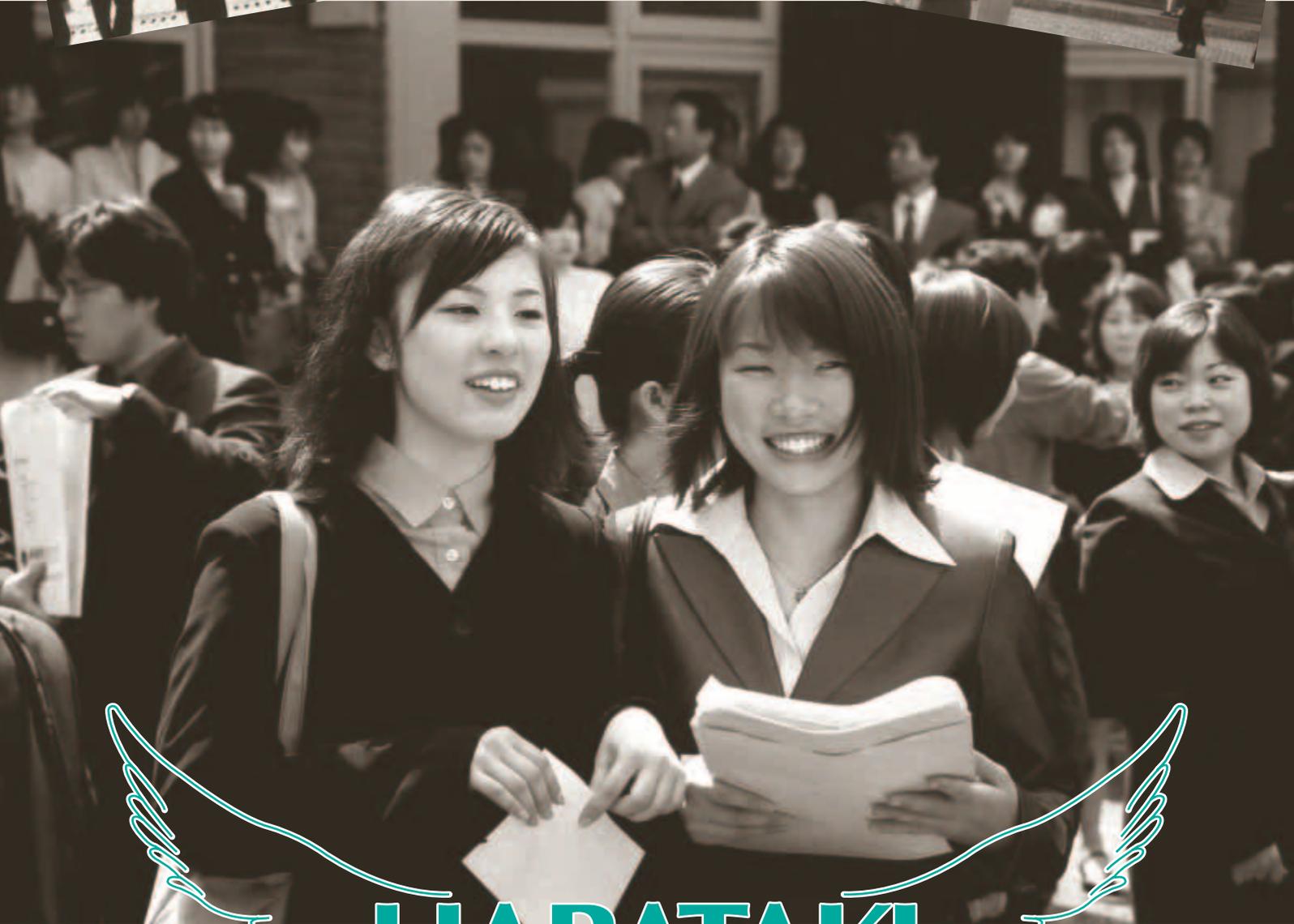


VOLUME

77

JULY
2001



HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, shizuoka-shi shizuoka-ken 422-8526 Japan

iNSide NEWS



平成13年度静岡県立大学入学式式辞

静岡県立大学学長 廣部 雅昭



平成13年4月10日、本学大講堂で静岡県立大学入学式が行われた。石川県知事を始め、多数の来賓の出席のもと、5学部549名の新入生を前に廣部学長が式辞を述べた。

また入学生を代表して、食品栄養科学部、長澤綾香さんが誓いのことばを述べた。

——*——*——*——*——*——

本日ここに、石川静岡県知事、芦川県議会副議長をはじめ、ご来賓の方々、また多数のご父兄のご臨席を賜り、盛大に平成13年度静岡県立大学入学式を挙行出来ますことは、誠に慶ばしい限りであり、関係者一同心から御礼を申し上げる次第です。

まず最初に、念願かない、記念すべき21世紀最初の年に、本学への入学を果たされた、5学部、549名の皆さんに対し、大学を代表し、心からのお祝いと歓迎の意を表したいと思えます。またこれまで長い間、ご師弟を慈しみ、支えてこられたご家族の皆様に対しましても心からの敬意とお祝いを申し上げたいと存じます。

本学は、昭和62年、静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の県立3大学を改組統合、あわせて新学部を増設し、発足したもので、現在5学部8学科、大学院5研究科、付属研究所、研

究施設および短期大学部を擁する総合大学であります。部局構成も、国際関係学部、経営情報学部、薬学部、食品栄養科学部、看護学部、医療・福祉系の短期大学部、環境科学研究所、というように、国際化、情報化、高齢化、環境問題という、21世紀における最重要課題を展望しつつ、新しい時代を支える有為な人材の育成を目標として設立された点で、先見性のある、わが国の中でもユニークな公立大学であると考えております。

しかし我が国も、本格的な少子化時代の到来を目前にし、長引く経済不況ともあいまって、国公立を問わず、すべての大学を取り巻く諸状況は、現在さらに厳しさを増してきており、その存在をかけた抜本的な意識改革が求められております。

本学も新世紀を迎えた本年は創立15周年目に当たりますが、あらためて建学の精神を想起するとともに、時代の変化をも十分視野に入れながら、社会の要請に応えようとする新たな転換を図る必要があります。20世紀における我が国の伝統的な学問体系や教育・研究体制が、急速に進展する国際競争社会の中で、十分機能し得なくなっていることと、成熟した学問や、教育・研究の成果を社会に積極的に還元することへの要望がさらに高まって来ていることも背景にあります。これまでのように“真理の探究”“学問の自由”という錦の御旗のもとに、象牙の塔に安住している時代ではなくなり、社会に貢献する、開かれた大学としての存在意義が問われる時代になって来ているからであります。

本学もそのような認識のもとに、厳しい経済状況の中ではありますが、現在積極的な施策を講じているところであります。すなわち高度医療の進展など社会のさらなるニーズに対応するため、大

学院看護学研究科を新設し、本年4月にその第一期生が入学することになりました。また本年4月より食品栄養科学部が管理栄養士養成施設として指定され、新研究棟の増設など環境の整備がはかられております。

また大学院経営情報学研究科では社会人を対象としたビジネス講座を県東部地区（沼津市）に開設し、地域のニーズに応えるための準備を進めております。

一方、学問領域が益々細分化、学際化する中で、教育内容の充実・拡大をはかる目的で、本学の学部間、大学院研究科の専攻間の単位互換制度を設ける一方で、地域大学間の研究・教育の連携も強化すべく、従来の静岡大学に加えて、静岡産業大学との間の単位互換制度も新年度からスタートさせることといたしました。それぞれの大学の独自性を発揮する一方で、地域の大学、試験研究機関、医療機関、民間企業などとの活発な交流が今後ますます重要になって来るものと考えております。

さて、このように急速に変わりつつある社会と大学の状況の中で、今日入学された皆さんは、明確な目的意識をもって、自らの意思で、それぞれの学部を選択したものと確信しておりますが、これからの講義等の中で、それぞれの設置目的や理念がどのような関わりをもって示されるのかを意識しつつ、積極的に学び取る姿勢が必要であります。また教育する側もそれに応える責任があります。

先日の新聞報道の中で、某有名国立大学の授業の3割が意味がなかったとの学生のアンケート結果が示されておりました。しかしその内容を吟味してみると、目的意識のはっきりしない学生ほど授業に対する不満が多いというものでした。漫然と聴いていても興味をそそり、理解出来るような講義は、大学には、まず存在しないと知るべきであります。これは教師の授業に対する熱意と工夫

以前の問題であります。私もかつて大学に入学した当初、授業はさっぱり理解出来ませんでした。さすがに大学は高校とは格が違くと妙に感動し、それからは毎朝最前列に席をとり、決して授業がうまいとは思えない教授の講義を真剣に聴き、理解出来るまで徹底的に質問をし、図書館で周辺知識を補充し、復習を繰り返すことで本当の意味が理解できたような気がいたしました。その時はじめて学問の真髄に触れたような気がして感動したことを覚えております。授業に意味があるかどうかは、多分にそれを受ける側の姿勢に依存するのではないのでしょうか。勿論学生をその気にさせる教師の熱意と人格的影響が大切であることは言うまでもありませんが、講義室が教師と学生との緊張感あふれる真剣勝負の場であるという意識が双方に必要であると思います。

最近産業界から大学に対してなされた要望書によりますと、現在産業界が求めている人材は、基礎的知識・教養があり、語学力、パソコン操作に長け、人柄が良く、学ぼうという姿勢を持った、やる気溢れる人物とのこととあります。いささか理想像を求め過ぎている憾がありますが、注目すべきことは、即戦力として役に立つ人材を求めるようになったという点にあると思います。かつていわゆるバブルの時代には、人柄が良く、やる気があって、健康な人材ならば専門は問わない。教育は企業で行うといていたのが、現在では、大学で何を専門に学び、どんな知識と技能を身につけ、どのように役立ってくれるのかという期待に転換したと言えらると思います。ある意味で、大学さえ出ればという目的意識のない学生を量産する背景にもなっていた、かつての時代感覚から、少子化に向かうこれからの時代は、実力のある少数精鋭主義へと社会の価値観が変わって行く前兆と見るべきであろうと思います。

21世紀初頭における社会状況は、益々多様化し、

豊かな未来を拓く原動力となるべき学術研究も、深く細分化される一方で、学際化、総合化の方向にも大きく展開して行くものと思われます。高度な課題探求能力、問題解決型の人材が、今広く社会から求められておりますが、そのような能力は、どのようにして涵養されるのでしょうか。私は学んだ知識をいかに活用できるか、何かに役立てようと常に思い巡らす知的好奇心と豊かな発想力を持ち得るかということにあると思います。そのためには知識は多様かつ多いほど良く、それを活用しようとする姿勢があれば、本当の生きた知識として身につけ、発想の原動力となるからであります。学ぶ量を減らし、基礎的知識も少なくしようとする現在の世の中の趨勢には首を傾げざるを得ません。いかに発想力の豊かな人間でも、知らないことから新しい発想など生まれようがないからであります。無から有は生じないのであります。皆さんのように若くて頭脳の柔軟な時期こそ、むしろ吸収出来るものはなんでも吸収しておくべきであると思います。“ゆとり”とは、必ずしも時間的な問題ではなく、発想に“遊び”が持てるかどうかという内面的なものであると私は考えます。

大学では、専門教育に入る前の導入教育として、いわゆる教養教育が行われます。本学でも全学共通科目として [人間と文化] [人間と社会] [人間と自然] というテーマのもとに、全学部の教員が協力して行っているもので、自身の目指す専門領域以外の分野の知識や考え方を学ぶことで、視野を広め、教養を高めることを目的としております。広く知識を身につけることの意味については先ほど述べた通りであります。一方で、これは昨年の入学式でも申し上げた事ですが、私はこの時期、学問とは何か。それは自分にとって将来どういう意味を持つのかなどを、専門分野を越えて共通す

る事柄を出来るだけ広く、かつ、その本質を学んでおくことが重要であると考えております。現在大学における教養教育のあり方をめぐって、その見直し論議が盛んでありますが、私は例えば歴史観に基づく考察力、人としての生き方などを深く思索する心を養うためにも、歴史学、倫理学、哲学、社会学など体系化された学問について、その入門書を難解であっても、じっくりと読むことを皆さんに勧めたいと思います。とくに新しい21世紀の進展する方向を予測する際に、過去の歴史を振り返ってみることが極めて重要であると思うからです。過去の様々な“発展と挫折”の歴史は、世界的な視野で見れば、必ずどこかに類似したモデルがあることに気づくはずで、歴史は繰り返す・・・同じ過ちを繰り返さぬことが人類の英知であると思うからです。そして様々な問題について、自身のしっかりとした考え方をもち、それを自分の言葉で人に語れるようになって欲しいと思います。その一方で自分の殻の中に閉じこもることなく、多くの社会との接点を持つことによって、様々な人々の考え方や生き方を知ることにも努め、他を理解し、許容できるスケールの大きな人間として成長して欲しいと思います。真の教養とはそのような滲み出るような全人格的な素養を指すもので、生涯をかけて涵養されるべきものと考えます。

次に、本学は創立以来、国際交流を標榜し、世界各国の大学、研究所などと交流協定を結び、教員、学生の相互交流などを行う一方、多くの留学生を正規に受け入れております。本年も学部、大学院あわせて7ヶ国22名の皆さんが入学をいたしました。現在、本学に学ぶ留学生は、新入生を含め12ヶ国、約80名に及んでおります。日本の象徴である美しい富士山を目の当たりに仰ぎ、しかも日本で最も快適な気候の静岡での充実した

留学生を送って頂きたいと、心から願っておりますが、異国の地での生活や勉学の面で、当初は不安や困難を感じることもしばしばあると思います。大学としても出来る限りの支援が出来るよう留学生委員会やアドバイザー制度を設ける一方、[国際交流談話室]を設置し、留学生とその他の学生、教職員との自由で円滑な交流が出来るように心掛けております。一方で留学生に対し理解の深い、地域の人々や奨学制度をもつ企業や団体も支援の手を差し伸べて下さっておりますので、留学生の皆さんも遠慮なく相談にお出で頂きたいと思っております。また留学生の皆さんに期待したいことは、異国の地では、不自由であっても、出来るだけその国の言語、文化、習慣に慣れるよう努力することと、自国の殻の中だけに閉じこもらず、多くの日本人や他国の留学生などとも接し、多くの事を吸収して頂きたいということでもあります。また日本の学生の皆さんも留学生の皆さんと積極的に交わり、支援することなどを通じて、異文化を理解し、国際感覚を磨く絶好の機会として頂きたいと思っております。

新しい世紀の最初の入学者である皆さんは、この大きな節目の時期に巡り合わせた者として、それぞれの感慨と決意、さらには大きな期待を胸に抱いておられることと思っておりますが、私はこの21世紀を「知と心の世紀」と定義したいと思います。

それは国際化、情報化、少子高齢化がさらに進む新しい時代の中で、さらに高度化するであろう科学技術、医療技術の進歩や、人々の価値観の変化は、大きな「知の再構築」をもたらす筈です。一方で20世紀において、物質的な豊かさを追求するあまり、失われた人間性の復活も大きな課題となっております。無限の可能性を求めて拡大する一方の「知的欲求」と、人間の本質に根差した「心の問題」のように、変わっても良いものと、

変わってはならないものとの、ある意味で異なった方向性を持った事柄を巧みに調和させて行くことが今世紀の大きな課題であると思うからであります。今IT革命の時代といわれ、情報通信技術のもたらす利便性、効率性は、将来の労働形態も、生活様式も、研究・教育の在り方までも大きく変化させることと思っております。これらの恩恵は大いに享受すべきであります。一方で、ただそれに流されることなく、人間同士のスキミングの大切さや、額に汗して働く尊さと、その中に喜びや生き甲斐を感じる事の出来る人間的感性を忘れないようにして頂きたいと思っております。

記念すべき年に、入学を果たされた皆さんは、新しい時代の担い手として、社会からも大きな期待が寄せられております。これからの大学生活を通して、豊かな知識を身につけ、さらにはそれを活用できる豊かな発想力を養う一方で、未知なるものへの飽くなき探求心と、未来に対する壮大なる夢とビジョンを画けるゆとりある心も持ちたいものであります。[知と心]のバランスのとれた有為な人材として、社会の付託に応えよう、日々研鑽に努めて頂くことを心から念願する次第です。

皆さんがこれからの4年間、生き生きとして、実りある学生生活を送り、本学に学んだことに誇りと喜びをもって卒業出来ることを心から願いつつ、皆さんへの歓迎の辞といたします。



誓いの言葉

新入生代表 食品栄養科学部栄養学科 長澤 綾香



やわらかな春の日差しが降りそそぐこの佳き日に、私たちは憧れの静岡県立大学に入学することができました。本日は、私たち新入生のために、このような盛大な入学式を執り行っていただき、誠にありがとうございます。

また、ただ今は、学長先生を始め御来賓の皆様方からの温かい激励とお祝いのお言葉をいただき、新入生一同大変感激しております。心から御礼申し上げますとともに、この感激を胸に、志を高く勉学に励んでまいりたいと存じます。

私達が生活する今の日本は、経済的にも、物質的にも大変恵まれており、私達が望むものは大抵手に入るなど、世界的にも稀な「豊かな国」といっても過言ではありません。

例えば、「食」ひとつ取り上げてみましても、食糧自給率の低い日本が、諸外国からありとあらゆる食料を輸入し、そして食べ残し、廃棄していますが、一方では世界中で毎日四万人の人々が、飢餓と戦う苦しみの中で亡くなっているという現実があります。

また、日本人の一見豊かで、満足感の高い「食生活」が、実は高カロリー、高タンパクであって、肥満や生活習慣病の最大の要因となっており、私達が「偏った豊かさ」の中で生活をしていること

は、否定できない事実であります。

私達は、「豊か」と引き替えに、「食」への感謝の気持ちを忘れ、更には「ゆとり」や「絆」といった、多くの人が、本当は心から欲しているはずの精神的な真の豊かさを、どこかに置き去りにしてきてしまったような気がしてなりません。

このことが、私が静岡県立大学食品栄養科学部を選択した理由でもありますが、本日入学を許可されました五五〇名の者は、薬学、食品栄養科学、国際関係学、経営情報学、看護学とめざす専門はそれぞれ異なりますが、21世紀という新たな時代を支える原動力となるため、日々精進努力してまいりたいと考えております。

新しい出発をするということは、希望で一杯の反面不安もあります。しかし、本日、新しい一歩を踏み出すことにより、今まで知ることのできなかった世界や新たな自分を発見する機会にも恵まれ、両親を始めこれまで支えてくださった方達への感謝の気持ちを再確認するのではないかと思います。

これからの4年間を大切に、勉学や課外活動等を通じ、今後、ますます進展する科学技術や国際社会の発展に大いに貢献できるよう、それぞれの専門性を高めつつ、自分自身の礎を築いてまいりたいと思っています。

とは申しましても、私達はまだまだ未熟です。勉学の仕方一つとっても予想がつかないというのが、正直なところ。そうした私達を、学長先生を始め諸先生方、諸先輩方には、厳しくご指導下さるようお願い申し上げますとともに、今日の感激を糧に、日々研鑽してまいりますことを改めて決意し、誓いの言葉とさせていただきます。

大学院 入学式式辞

静岡県立大学学長 廣部 雅昭



本日ここに、平成13年度 静岡県立大学・大学院の入学式を挙げるにあたり、激励の言葉と、これからの研究生活について、若干の感想と希望を申し上げたいと思います。

まず本年度大学院に入学を許可された5研究科合計172名の皆さんに対し、心からのお祝いと歓迎の意を表したいと思います。特に本年は新たに設置された看護学研究科修士課程に8名の一期生が入学されました。期待を込めて、あらためてお祝いを申し上げる次第です。

皆さんは、大学の学部教育を経て、さらに高度で、より専門的な知識、技術・技能を学ぶ一方で、研究の蘊奥を極めるべく、大学院に入学された訳であります。

新しい世紀を迎え、現在わが国の社会状況は益々複雑多様化し、混迷の度を深くしておりますが、確実に予測されることは、国際化、情報化、高齢化といった時代背景の大きな変化に加え、科学技術、医療技術などが、さらに飛躍的な進歩をするであろう……ということでもあります。その一端を担うべき大学、大学院などの高等教育・研究機関は、それぞれの教育・研究の質を格段に高め

るとともに、人材育成に対する社会の多様な要請に適切に対処する必要があります。

特にこれからの大学院に求められることとして、文部科学省は、◎学術研究の高度化と、優れた研究者の養成機能の強化、◎高度専門職業人の養成機能と、社会人の再学習機能の強化、◎教育研究を通じての国際貢献の3点をあげております。

すなわち、大学院では、それぞれの専門分野で、高度な研究者とともに、高度な職能人を育成することが、課せられた大きな使命の一つであるといえます。それぞれの専門領域の知識や技術は、ますます深く、かつ拡大の一途をたどっており、これら先端的知識や高度な技術を習得するためには、大学院においても教育の比重を高めることが、少なくとも修士課程においては必要になっております。しかし大学院では、ただ単に既成の高度な専門知識や技術を習得するだけでなく、それを有機的に結び付け、応用的展開がはかれるような研究者的能力を身につけることが重要であると考えます。そこが学部教育と根本的に違うところであり、この点については、理系も文系も基本的には同じであると思います。

次に大学院に求められている今一つの大きな使命は、学術研究の高度化とそれらを通じて、優れた研究者を育成することであり、博士課程に進学する皆さんは、将来独立した研究者として、その一翼を担うことが期待されていると言えます。20世紀における科学技術の著しい進歩は、新しい21世紀の発展の姿を的確に予測することを困難にしておりますが、間違いなく言えると思うことは、これまでの知識偏重の専門の細分化、深化の方向から、学際化、総合化の方向に大きく転換するで

あろうということであり、それは成熟した研究の成果を地球社会のために役立てるべきであるという世界的要請が背景にあるからであります。

大学あるいは大学院における研究は、本来基礎研究に重点がおかれるべきであります、その成果を社会に役立つように分かりやすく発信することが今後強く求められると思います。基礎研究も画期的な応用研究に結びついてこそ、光り輝く価値ある存在として評価されるということを大学の研究者も認識すべきであると思います。

昨年白川英樹筑波大名誉教授にノーベル化学賞が授与されたことは、我が国科学界に嬉しい衝撃を与えました。私も「これは快挙だ」と思わず興奮いたしました、それは、ほとんど学界でも無名に近かった人が、しかも研究費に恵まれない環境の中で、数十年も前に行った研究が評価されたことと、若い未熟な研究者が失敗した実験結果から閃いたという、鋭い研究者ならではの洞察力と発想力に感動し、かつ共感を覚えたからであります。これから研究者の道を進む皆さんにとっても、とくに実験科学の分野では、このような体験は少なくない筈であります。すぐれた研究のシーズは意外なところにもあるということ、ノーベル賞を身近に感じさせてくれた点で白川博士の功績は非常に大きいと思います。しかし見逃してはならないのは、このような素晴らしい基礎研究も、導電性プラスチックという現代の情報通信技術に欠かせない汎用性素材へと応用されたからこそ脚光を浴びたのであり、その域にまで研究を高めた米国の2名の共同受賞者の存在があつてのことです。他の日本のノーベル賞受賞業績のほとんどが外国で評価され、花開いていることを思うと、日本の基礎研究の在り方について考えさせられるものがあります。社会に役立つ応用的展開があつてこそ、価値ある基礎研究になるということ、あらためて銘記すべきであると思います。

これは昨年の大学院入学式の際にも申し上げた

ことではありますが、特に博士課程に進まれる皆さんは、独立した研究者として、新しい独創的研究に挑戦する意欲を持たなければなりません。独創的な研究に手本はなく、発想を豊かに、余念なく考える思考過程の中から、ひらめくものを大切に、一見荒唐無稽と思われるものであっても恐れず、大胆な仮説をたて、実験によって、それを確かめて行く地道な努力が必要であります。情報通信技術の進歩は、他の研究者の様々な研究成果や既知の情報を得る手段は提供いたしますが、未知なる情報や、ましてや貴重な“失敗の実験結果”などは、パソコンから得られよう筈がありません。新しい発見や、発想のシーズは、実験台から生まれるという当然のことを実験科学を志すものは、あらためて想起すべきであります。しかし一方で、最初から真に独創的な研究が誰でも出来る訳ではありません。ある段階では優れた研究者、指導者の模倣からスタートすることには十分意味があります。例えば、研究者としての第一段階である修士課程においては、より専門的な知識と、高度な技術を、身につける努力をする一方で、研究のあり方、進め方を学ぶことが重要であります。その際、内外の優れた研究者の論文、とくにレビューを丹念に精読することをお勧めいたします。そこからは研究の背景、展開の道筋、研究者の哲学が読み取れるからであり、学ぶべき価値あることであります。

先ほど基礎研究と応用研究双方の重要性について指摘をいたしました、これらは相互に啓発し合うことにより、それぞれの発展があり、基礎研究を深めることは、新しい画期的な応用研究を生み、応用研究の展開は、必ず新しい基礎研究を必要とし、そのシーズを提供するからであります。このような基礎研究と応用研究相互のフーズバック機構が円滑に機能する研究体制、あるいは個人の思考回路が、これからの時代には益々重要になって来ると考えます。本学は学部および大学院ともに、その部局構成が、学際的かつ応用的な性格を有しており、このような研究体制を構築する

には適した環境にあると思われ、今後大学院における教育、研究においても部局横断的な活発な交流が行われることを是非期待したいと思います。

次に、現在静岡県が推進しようとしている、いわゆる「ファルマバレー構想」といわれる「富山麓先端医療産業集積構想」がありますが、この構想は、世界レベルでの高度医療、技術開発を目指して、国内外の医療関連産業、研究機関、大学、行政などの産学官が結集するとともに、静岡の豊かな自然環境と地域資源を最大限に活用しながら、最先端の科学技術を生かした研究開発の促進と医療関連産業の振興を図ろうとするものであります。

その中で本学は“学”の立場としての中心的役割を担うことが期待されておりますが、それに応えるためには、国際競争力を高めつつ、他の追随を許さぬ、しかも世界から注目されるような、地域に根差した特徴のある独創的研究を展開するのが、公立大学として賢明な一つの選択であろうと思います。

また産学連携は、とくに地域貢献を使命とする公立大学にとっては、今後重要な“キーワード”となると考えますが、大学の基礎研究の成果を社

会に還元する、最も基本的な形として、我が国においても、ようやく本格的な取り組みが始まるようになりました。新しい時代の趨勢として当然ではありますが、国際的に見れば遅きに失したともいえます。長年の慣習が生み出した様々な規制や、大学人の意識の変革が伴わないこともあり、掛け声ほどには実効が上がっていないのが現状であります。本学も産学連携推進委員会を設置し、まず大学における研究情報を公開し、産業界のニーズに応える試みを始めておりますが、シーズとシーズの情報交換が一方通行ではなく、連携体制が円滑に機能するような財政支援を含む抜本的な方策が必要であると感じております。

資源に乏しい我が国が、国際的な競争力を備えるためには、知的資産の増強を図ることが必須であり、大学が知的資源、人的資源を生み出す活力ある源泉とならなければ明るい未来はないといえます。その意味でも、大学院生の皆さんは、新しい時代を担う、重要な知的活動の推進者として、社会から大きな期待が寄せられております。そのことを十分自覚し、最も研究が出来るこれからの時期を大切にして、大いに研鑽されんことを心から期待し、大学院入学の歓迎の挨拶といたします。

学長室 “開放” のお知らせ

現在社会が求める『開かれた大学』を目指すには、大学内の様々な情報を可能な限り社会に発信し、説明責任を果たすとともに、広く社会の意見・要望を聴取する姿勢、すなわち大学と社会との双方向的な関わりが、今後の大学の発展のために不可欠であると考えます。

ひるがえって大学内においても、学長と教職員・学生とのコミュニケーションを円滑化し、構成員との直接的な意見交換の機会を設けることが、透明性のある風通しの良い大学運営を行うために必要であると考え、次のとおり“学長室開放”を行うことといたしました。遠慮なく

来室されることを歓迎いたします。

◎対 象：教職員、学生
◎場 所：学長室（管理棟 2 階）
◎時間帯：第 1、3 月曜日
12：30～13：30（予約不要）
（但し公務の関係で不可能な場合もある）
※上記曜日・時間帯以外の場合も可能な限り対応いたしますが、その際は必ず予約（学長秘書：内線 5000）をして下さい。

平成12年度 卒業式式辞

静岡県立大学学長 廣部 雅昭

平成12年度静岡県立大学学部卒業式、大学院学位記授与式が平成13年3月21日に本学大講堂で行われた。石川静岡県知事をはじめ多数の来賓の出席のもと、廣部学長が式辞を述べた。

——*——*——*——*——*——

平成12年度卒業式式辞

本日ここに石川静岡県知事はじめ多数のご来賓、ご父兄の方々のご臨席をいただき、静岡県立大学平成12年度、学部卒業式ならびに大学院学位授与式を盛大に挙げていきますことは真に喜ばしいことであり、関係者一同心から御礼を申し上げる次第です。

日頃の研鑽の成果が実り、本日卒業を迎えられた5学部509名、大学院研究科修士課程114名、博士課程14名の皆さんに対し、大学を代表して、まず心からのお祝いを申し上げたいと思います。とくに本年は4年前に新設された看護学部から初めての卒業生56名を社会に送り出すこととなりました。期待を込めて、あらためてお祝いを申し上げます。またこの日を心待ちにされ、喜びを分かち合っておられる、すべての卒業生のご家族の方々のこれまでのご苦勞、ご支援に対しましても、心からの敬意と感謝を申し上げたいと存じます。



本年はいうまでもなく新しい21世紀のスタートの年であります。この記念すべき大きな節目の年に卒業し、社会に巣立って行く皆さんは、それぞれの感慨と新たな決意を胸に秘めていることと思いますが、皆さんを迎える社会は現在大きな転換期にあり、未だ混迷の域を脱しきれない厳しい状況にあると言えます。新しい時代の到来の前の“産みの苦しみ”ともいえますが、それだけに新しい時代の担い手となるべき若い皆さんに対する社会の期待は極めて大きいものがあり、それに応える自覚と今後の努力が強く求められるものと考えます。

皆さんに対する社会の期待は、大学において、どれだけの付加価値を身につけて来るかということにあります。言い換えれば、何を学び、どのような知識を身につけ、そして社会のためにどのように役立ってくれるのか、またどのくらい人格を高めたかという点にあると思います。特に最近の産業界からの評価には厳しいものがあり、新規卒者の基礎的職務遂行能力や基礎学力の低下、入社3年以内の離職率が卒業で3割にも達していることなどが厳しく指摘されております。原因を学生の皆さんにのみ転嫁することは酷であります。情熱を持って努力するものが報われ、易きに流れるものは淘汰される時代になっているということを強く自覚する必要がある・・・ということを先ず冒頭に申し上げておきたいと思っております。

さて、21世紀の課題は、本格化する少子高齢化、国際化、情報化のうねりの中で、さらに高度化する科学技術がもたらすであろう様々な恩恵を享受する一方で、負の影響も含めて、それらが人間社会にどのような変化をもたらすのか、十分な予測は困難であるにしても、的確に対応しつつ、誤っ

た方向に進まぬよう人類が英知を働かせることであると考えます。未来を予測することは難しくても、過去における発展と挫折の因果関係を検証し、未来に備えることは可能であります。歴史観に基づいた考え方の重要性を強調したいと思います。[温故知新]という言葉がありますが、「旧きを尋ねて新しきを知れ」という意味であり、私は研究者に対して「過去の未解決の課題の中に新しい発想のシーズがある」という意味で良く用います。また歴史に学べ。歴史は繰り返す。同じ過ちを犯すなという意味にも通ずると考えております。

激動の20世紀を振り返って見るに、その前半は世界的に戦争の世紀であったと言えます。現在まだ局地的には戦争が皆無になったとはいえないものの、戦争の悲惨さと平和の尊さを“学習”した人類の英知が再発の抑止力になっていると思われる、このことは戦争を知らない若い世代に是非伝えておくべき責任があると思っています。わが国において、20世紀後半、敗戦後の荒廃から立ち上がり、驚異的な復興と経済大国といわれるまでになったのは、豊かさを求め、懸命に働いた国民の願望と努力、見識あるリーダーの存在があったからであると思います。著しい科学技術の進歩、高度医療の普及は豊かな国民生活と長寿社会をもたらし、米国型自由教育と民主主義の導入は、国民の平均的教育レベルを向上させ、平等主義を浸透させることになりました。しかし光のあるところに必ず陰ができるように、環境破壊、公害問題、医療過誤、経済社会の破綻、教育の荒廃、家庭崩壊、人間性や個性の喪失など負の面が近年とくに顕在化して来ていることはご承知のとおりであります。

現在、改革に向けての様々な提言や取組みがなされてはおりますが、過去における発展と挫折の因果関係を十分検証した上での改革でなければ実効は望めず、また将来起こり得る問題に対して指



針となるものでなければなりません。混迷の時代に生きる若い皆さんも、ただ社会が悪いと責任を転嫁するのではなく、何故このようになったのか、その掘って来る原因を過去の歴史を十分検証することによって理解し、皆さん自身の今後の糧として頂きたいと思います。

一方、新しい世紀の始まりに際して、様々な形で未来予測がなされております。夢を描くことは人間の特権であり、努力する目標を持つことは極めて大切なことであります。先日ある講演会で大変興味のある話がありました。それは今から100年前の明治34年1月2日の報知新聞に掲載された[20世紀を占う未来予測]に関する記事のことでした。講演の中で、その当時の予測が、100年後の今日ほとんど実現しているということが示されたことです。例えば[暑さ寒さ知らずの生活が可能になる]→エアコンの出現などはそれを示していると思います。[空中戦艦が出現し、世界一周は7日ですむ]→ジャンボ飛行機や宇宙衛星の出現は予測をはるかに超えて実現しています。[伝声機(声を伝える機械)その改良ありて、十里を隔てたる男女の情話をなすことあるべし]→まさに現在の携帯電話の普及を予測しております。すべてを紹介する時間はありませんが、ただ一つ当た

らなかったものは「動物との会話」だそうであり、これらの結果についてアメリカのアーサー・クラークという人が、「予測というものは当たるものだ。なぜなら、それは人間の願望だからだ。願望を達成すべく人が努力するから実現する。つまり願望を伴った予測は当たるものだ。しかし「動物との会話」のような理に合わぬものは当たらない・・・」とコメントをしております。現在情報科学の著しい進歩の中で、「動物との会話」が一つの実現目標になっているようですが、果たして理に合わぬ事柄なのか興味のあるところです。

私が申し上げたいことは、何事も目標をたて、常に実現への強い願望を持ち続けて努力すれば、必ず結果はついて来るということと、「棚から牡丹餅」とか努力を欠いた「果報は寝て待て」などは、所詮理に合わぬ実現不可能な夢と知るべきである・・・ということでもあります。

次に、新世紀の国策の一つとして、現在IT革命ということが盛んにいわれております。すでに情報通信技術の進歩は、社会のシステムそのものを大きく変えつつあり、まさに世界的な革命が起こることは確実であります。労働の形態も、生活の様式も、研究や教育の方法論も大きく変わることと思います。利便性、効率性という観点からは素晴らしいことであり、国境を感じさせない、世界が一つになる時代が到来することと思います。居ながらにして様々な情報が手に入る。情報の活用によって、そこから新しい発想も生まれて来るはずで、情報を見落とすことがなくなれば、そのために無駄な労力を費やすこともなくなるでしょう。しかし輝かしい発展の裏に潜んでいる陰の部分についても、私たちは常に心にとめておく必要があります。すでにその兆候が現れているように、人間同士のスキミングの欠如、悪質で無責任な情報の流布、新卒の悪質商法等、人の息づか

いも心の動きも正しくは伝わらない文字情報の世界に埋没することで、物質文明の発展によりもたらされたといわれる人間性の喪失にさらに拍車がかかるのではないかと。また自分の目的に沿った情報を集めれば、それを巧みに編集することで本の一冊ぐらいいは簡単に作ることが可能でしょう。IT時代は「コピーの文化」「レビュー、ダイジェストの文化」へと人々の価値観が変わって行くことが予想されます。その際どれが自分の本当の考えなのか自分でも分からなくなってしまうのではないかと。個人のオリジナリティやプライオリティはどうなるのか。ましてや知的所有権などはどのようにして確保されるのか。それらへの対策を講ずる必要が出てくるものと思われまふ。

情報化時代に生きる皆さんには、特に主体性を見失うな。自分自身のしっかりとした考え方をもち、自分の言葉で語れ。人間的な心の触れ合いをより大切にせよ。ということをお願いいたします。

現在産業界が求めている人材は、基礎的知識・教養があり、語学力、パソコン操作に長け、人柄が良く、学ぼうという姿勢を持ったやる気溢れる人物であるといわれております。皆さんは大学での生活でこれらをどれだけ身につけ得たでしょうか。今後のさらなる努力が必要であるということ肝に銘じておかなければなりません。冒頭にも申し上げましたように、皆さんが巣立って行く社会は、決して甘いものではありません。特にこれからの時代は、個人の能力や努力の成果が常に評価され、それに対応した処遇が行われる実力主義の社会になると思います。これは戦後の一律平等主義の浸透が、競争や区別を好まない体質を生み、良い意味のエリートや、リーダーが育たない素地を作り、結果として形成された衆愚の社会が、現在の混迷状態を生み出した一つの大きな要因で

あるとの反省に立った社会の動きであると言えます。今後あらゆる面で“評価”ということが強調されて来ると思いますが、評価という本来の意味は、“価値を認める”というプラス指向の行為なのであります。人にはそれぞれ個性があり、潜在的な能力もあるはずで、それらを含めた多面的な評価がなされるべきであり、むしろ積極的に評価を受ける姿勢があつてしかるべきであると考えます。自ら努力し、良い成果をあげている者などが正しい評価を望むのは当然のことであり、自己をアピールすることもこれからの時代には必要であります。研鑽に努め、自己を高めてゆくためにも、そのような緊張感のある競争的環境は必要であり、皆さんを待っている、これからの社会は、まさに競争的環境そのものであります。評価されることを“いじめ”や“差別”などと思うのは的外れであり、それに耐える強い精神力を持つことこそ、これからの時代を、落ちこぼれることなく生きて行くために大切なことなのであります。

これからさらに大学院において研鑽を積まれる皆さんも、たとえ大学という環境の中に引き続き留まるとしても、社会人としてのより強い自立感、責任感を持たねばなりません。また研究生活は、まさに厳しい評価の上に成り立つもので、それなくして研究の発展は有り得ないのであります。研究成果を論文として発表するのは国際的な評価を受けるためのものであり、国際化が進む中で、国際的研究水準を目指すのであれば、成果を世界に発信し、評価を謙虚にうけとめ、さらなる努力を重ねる気概が必要であります。現在本学においても、昼夜を分かたず研究に勤しんでいる皆さんの先輩研究者は、そのための努力をしているのであり、是非その姿を学んで欲しいと思ひます。

最後に本学に学び、このたび卒業を迎えられた学部8名、大学院6名、計14名の留学生の皆さんに心からのお祝いと激励を申し上げたいと思ひます。母国を離れ、異国の地にあつて勉学生活を送ることは並大抵のことではありません。言葉のハンデ、文化や生活様式の違い、中には生活のためにアルバイトを余儀なくされた人達も多かったと思ひます。皆さんの心を傷つけた、心ない不幸な事態もありました。大学として果たして十分な対応が出来たか、反省すべき点も少なくありません。しかしこれら諸々の事を克服し、多くのことを学び、生涯の友人をつくり、全てを良い思い出として、帰国され、将来も日本そして静岡との交流の架け橋になって下さることを心から願つております。また留学生の皆さんに深い理解と支援を惜しまれなかつた地域の多くの方々に対しましても、この場をお借りして感謝を申し上げたいと存じます。

21世紀最初の卒業生になる皆さんに対し、社会の厳しさと、それに臨む心構えについて申し上げましたが、萎縮する必要は毛頭ありません。新しい時代を造るのは君たち若い世代なのです。大いに夢と希望をもって、明るく、何事にもプラス思考で、世の中を変えて行きたい、行くのだという願望と気概をもち続け、若いバイタリティを存分に発揮して下さることを心から期待し、新たな門出にあたって、卒業生の皆さんに対するはなむけの言葉といたします。ご卒業おめでとう。



名誉教授の称号授与

5月25日開催の評議会で、青山政雄前短期大学部教授、須田悦生前短期大学部教授、富田多嘉子大学院生活科学研究科教授、中村健壽前短期大学部教授、野呂忠敬前大学院生活健康科学研究科長に名誉教授の称号を授与することが承認された。



青山 政雄
前短期大学部教授

青山前教授は、昭和50年4月に本学の前身である静岡女子短期大学に着任され、以来26年間の長きにわたって研究と教育に従事された。その間、学生部長として2期4年の間、学生指導に情熱を傾けられ、また、浜松校最後の1年間は副部長として廃学科という難事業にあたられた。

青山氏が一貫して追求されてきた思索と研究の対象は、国家と市民社会の相克と分裂という問題である。この対象をめぐる、ヘーゲルの国家論、マルクスの世界把握の方法について思索が重ねられた。哲学において、先生の思索を導いたものは、疎外の超克の問題、「人間の可能性の解放」という主題であった。思索はさらにフロイト、マルクーゼ、ハバーマスに及び、ヘーゲル―マルクスの国家論を疎外論として深める独自の視座を獲得された。

青山氏の思索は、高い評価を受けた『社会批判の哲学―ヘーゲル、マルクス、マルクーゼ研究序説』として結晶し、これはヘーゲル、マルクスを学ぶ学生の必読文献の一冊に数えられている。

教育の面においては、疎外の超克の問題は「生きがいの探求」という日常語に翻訳され、数多くの学生が現代社会における自己の生きがいに思考を開かれた。



須田 悦生
前短期大学部教授

須田前教授は、昭和49年10月に本学の前身である静岡女子短期大学に着任され、平成3年3月、本学浜松校閉校に伴い退職されるまで、26年6ヶ月にわたり研究と教育に従事された。

専門の日本演劇史では幸若舞・能狂言などの日本中世演劇研究において、学界の高い評価を受けられた。長年の臨地調査の結果をまとめた『若狭猿楽の研究』で第25回日本演劇学会河竹賞を受賞された。

学会活動は、国内のみならず、中国の少数民族の臨地調査をはじめ、雲南大学における学会など、国際的にも活躍の場を広げてこられた。

教育面では、「日本古典文学」「日本文学史」「日本演劇論」などの講義で古典文学の構造や研究法を講じ、演習科目「文化教養総合演習」では、フィールドワークの実際を通して、学問の基礎のみならず人格形成にも情熱を傾注された。

他方、静岡県西部新大学開設準備委員会文化政策学部専門委員会委員や静岡文化芸術大学国際文化学科分科会委員として貢献された。

一方、社会的活動において、各種講演を企画実行し、研究成果を市民に還元し広くその名を知られ親しまれた。また、静岡県西部高等教育ネットワーク会議共同授業運営委員、静岡県西部高等教育ネットワーク図書館連絡会会長として、県西部地域所在の大学による共同授業を実現し、各大学の図書館を結んだ総合図書館構想の道を開かれた。



富田 多嘉子

前大学院生活健康科学研究科教授

富田前教授は、昭和42年に静岡薬科大学に着任され、本年3月まで、静岡薬科大学、県立大学在職34年間を通じ、生物系薬学、生物系環境科学の教育研究の基盤整備に尽力された。薬科大学では約20年間実験動物センター長、また県立大学では同SPF施設主任を務め、実験動物施設の充実に尽力された。また平成11年から2年間県立大学評議員を務められた。

教育面では、内分泌薬理学、生物検定法、生体機能学特論、環境毒性学特論等の講義を担当、学部および大学院生の教育研究指導に携わり、多くの学位取得者を海外留学に導かれた。自主講座「病気のメカニズム」や「Hearing & Speakingを中心とした科学英語」などを開き、学部、学年を越えた学生が多数参加した。

研究面では、県立こども病院との共同研究で「小児からの動脈硬化予防」研究を立ち上げ、WHOの会議に招待され静岡県における結果を報告された。「低密度リポ蛋白と内皮機能」や「動脈硬化と女性ホルモン」に関する研究は後に、内分泌かく乱化学物質の研究に発展した。また、科学技術庁の「内分泌かく乱化学物質」研究班のメンバーとして「内分泌かく乱化学物質の脳の性分化への影響」の研究に取り組まれた。

学外においては多くの学会の評議員などを勤められるとともに、数々の国際学会でも講演、招待講演され、海外の大学との共同研究も行ってこられた。

社会的活動としては静岡県選挙管理委員会、公害審査会、環境審議会各委員、静岡市環境審議会、開発審査会各委員、静岡市立静岡病院懇話会会長、清水市開発審査会などの職責を果たされた。



中村 健壽

前短期大学部教授

中村前教授は、昭和62年4月の静岡県立大学短期大学部発足とともに本学に着任されました。以来、平成13年3月に本学浜松校の閉校に伴い退職されるまでの14年間にわたり、文化教養学科の中心となって、本学の運営および教育・研究に精力を傾けられた。

中村氏は、文化教養学科において学科代表を通算3期務められ、さらには、本学の将来構想策定にあたっては幅広く深い学識を遺憾なく発揮して委員会をリードされるなど、学科の枠を越えた多大な貢献をされた。

教育面では、新設の秘書教養コースの秘書学担当教員として、その重責を担ってこられ、文部省認定資格である「秘書技能検定」に毎年多数の合格者を輩出してきた。また「東洋文化史」をも専門科目として教授されるなど、数多くの学生たちがその薫陶を受けてきた。

学術研究面では、現代社会の秘書の機能を明らかにすることに、その主眼を置かれた。実証的な現状分析と深い理論的考察の両面からのアプローチは、学界の高い評価を受けられた。また、発展途上の学問としての秘書学を牽引する立場として、日本秘書学会（現日本ビジネス実務学会）理事等の要職を務められ、さらには「秘書技能検定」専門委員等として秘書教育の普及・向上にも尽力された。

社会的活動としては、浜松市の「静岡県西部高等教育ネットワーク会議」プロジェクト委員として、市民一大学間交流の道を開かれた。また、「静岡文化芸術大学」の開学準備委員会専門委員や分科会委員として活躍された。



野呂 忠敬

前大学院生活健康科学研究科長

野呂前教授は、昭和42年4月に静岡薬科大学薬学部に着任され、本年3月まで生薬学、薬用植物学、植物化学、環境植物化学、生態化学等を担当され、研究、教育に努力を傾注し、学生の育成に努められた。

大学での役職としては、評議員、大学院研究科長、専攻長、教務委員、公開講座委員、自己評価委員、その他を歴任され、大学の管理運営や教育に熱意をもって当たられた。特に、博士課程の立ち上げや研究所の新設の際には、山積する問題や事務を処理され、環境物質科学専攻、環境科学研究科の礎をつくる功績をあげられた。

学会関係では、環境科学会、日本薬学会（支部

幹事）、マリンバイオテクノロジー学会、付着生物学会、日本水処理生物学会、日本生薬学会（評議員）等の会員として幅広く活躍されている。

研究面では、植物成分の抽出・単離・構造決定を基本とし、キサントキシダーゼやモノアミノキシダーゼ、その他の酵素阻害物質の検索を行うとともに、生態に関わる植物由来成分の同定等、多くの天然物活性物質を明らかにされた。

一方、社会活動としては、環境問題に取り組む地球人会議（幹事）、静岡県田園空間計画策定委員会審議委員、その他を歴任された他に、静岡県自然学習指導員や日本自然保護協会自然観察指導員として地道な自然環境保護活動にも取り組んでおられる。

いよいよ始まる高・大連携

わが県大でいよいよ本格的な高・大連携への試みが始まった。本学は、静岡県立静岡東高等学校の生徒に対し、教育内容の理解を深めさせるとともに、生徒自らの進路決定への意識的な取り組みの促進に協力することを目的として、国際関係学部の「国際社会論ⅢA・B」、「ヨーロッパ史ⅠA・B」、「日本とアジアA・B」及び経営情報学部の「情報社会と経営」の4科目を聴講できることとした。

3月28日に本学において協定書の調印式が行われ、4月から既に受入れはスタートしており、生徒は高校の放課後を利用して月曜日と金曜日の5限の授業を受講している。受講を終えると本学から修了証書が交付され、高校でも増加単位として認定されることになっている。

「県大の講義を受講して」

佐藤 弘一

大学の講義は、僕にとって非常に新鮮なものでした。話は実際的で含蓄に富み、高校の授業とはまた異なった形で興味を惹かれました。内容はやや難しかったのですが、明確なテーマと、それに即したわかり易い展開のために、方角を失わずについてゆけるのだと思います。当初は来年の為に大学の雰囲気を知っておこう、と少し気負っていたのですが、早速馴染んでしまい、純粋に楽しむことができている。

最後になりましたが、僕たちを温かく迎えてくれた皆様方、大変有難うございます。そして今後もよろしくお願ひします。

（日本とアジアA受講）

平成12年度 科学研究費内定状況

■採択件数の推移

年度別	申請件数	採択件数	採択率
H10	199	54	27.1%
H11	176	63	35.8%
H12	194	59	30.4%
H13	181	53	31.0%

平成13年度新規採択されたテーマ

■基盤研究 (A) (2)

・西田 ひろ子 国際関係学部教授
在外日本人と現地住民との対人コミュニケーション摩擦研究：中国、米国進出日系企業における派遣社員と現地従業員との間のコミュニケーション困難度調査を中心に

■基盤研究 (B) (1)

・鈴木 康夫 薬学部教授
変異を克服しウイルスの侵入および遊離を二重阻止する次世代抗インフルエンザ薬の開発

■基盤研究 (B) (2)

・鈴木 康夫 薬学部教授
インフルエンザウイルスの宿主動物種間伝播機構の解明と感染制御

・野口 博司 薬学部教授
カルコン合成酵素の生化学・化学的多様性

・増沢 俊幸 薬学部助教授
ユーラシア大陸におけるライム病ボレリア種の分布、維持伝播機構解明とライム病の制圧

■部局別採択状況 平成13年度

部局別	申請件数	採択件数	採択率
薬学部	78	23	29.5%
食品栄養科学部	29	10	34.5%
国際関係学部	16	9	56.3%
経営情報学部	10	4	40.0%
院生活健康科学研究科	30	4	13.3%
看護学部	18	3	16.7%
合計	181	53	29.3%

* 国際関係学研究科は国際関係学部、環境科学研究所は生活健康科学研究科に併せ計上

* 申請件数、採択件数ともに継続課題を含む

■基盤研究 (c) (1)

・川瀬 光義 経営情報学部教授
沖縄における基地・補助金依存型財政から環境保全型財政への転換を目指す研究

・中山 勉 食品栄養科学部教授
脂質二重層におけるカテキン類の状態分析

■基盤研究 (c) (2)

・小原 一男 薬学部講師
血管平滑筋の伸縮誘発性収縮におけるミオシンホスファターゼ調節機構の役割について

・石川 智久 薬学部助教授
臍ランゲルハンス氏島において構成型NO合成酵素により産生されるNOの生理的役割

・池田 潔 薬学部助教授
ハイブリッドプロセスによるパラインフルエンザ治療薬の開発研究

・田中 圭 薬学部教授
新規不斉タンデム型炭素-炭素結合形成反応の開発と利用

・豊岡 利正 薬学部教授
蛍光共鳴エネルギー移動を利用した金属蛍光プローブの開発

・山口 正義 生活健康科学研究科教授
細胞内Ca²⁺制御蛋白質レギュカルチン遺伝子導入動物における生体機能調節の解析

・武田 厚司 薬学部助教授
遷移金属による脳内神経伝達調節機構の解析

・土井 まつ子 看護学部教授
カテーテルに関する血流感染を低減するための感染管理対策

・矢野 正子 看護学部教授
20世紀における看護政策課題とその分析に関する研究

・木苗 直秀 食品栄養科学部教授
活性酸素共存下でのメイラード反応による新規変異原の生成と植物成分による生成抑制

・貝沼 やす子 食品栄養科学部教授
竹炭の調理・加工への利用に関する基礎的研究

■奨励研究 (A) (2)

・駿河 和仁 食品栄養科学部教授
小腸における核内レセプターのリガンドシグナル伝達機序と遺伝子発現制御に関する研究

・加藤 大 薬学部講師
モノリテック型カラムを用いたCEC法による生体試料の分離分析法の確立

・池本 守 薬学部講師
HDL受容体SRBIの結合蛋白質による新規コ

研究助成の採択

●平成13年度 厚生科学研究費（生活安全総合研究事業：厚生労働省）採択

「内分泌かく乱物質に対する感受性の動物種差の解明：チトクロームP450発現を指標として」

薬学部 教授 出川雅邦

●2001年度 武田科学振興財団薬学系研究奨励金

「糖鎖性接着分子P-セレクトインリガンドが誘起する情報伝達系の分子機構の解明」

薬学部 助手 左 一八

人 事

短大部から異動（4月1日付け）

小國 伊太郎	食品栄養科学部教授
貝沼 やす子	食品栄養科学部教授
斉藤 慎一	食品栄養科学部助教授
白木 まさ子	食品栄養科学部助教授
亀山 良子	食品栄養科学部助手

採用（4月1日付け）

岩崎 邦彦	経営情報学部助教授
黒羽子 孝太	薬学部助手
末永 聖武	薬学部助手
池本 守	薬学部講師
橋本 伸哉	環境科学研究所助教授
マイケル・セレグレン	環境科学研究所助手
高田 ゆり子	看護学部教授

平成13年度 漢方と薬草の会 開催案内

—生活習慣病の予防と治療—

会 場 静岡県立大学看護学部4階 13411講義室（午前）
静岡県立大学薬草園（午後）
参加費 不要（開催当日、直接会場へお越し下さい）

第1回 平成13年6月3日（日） —糖尿病と漢方薬—

午前（9：30～12：30）

- | | | |
|-------------------------|--------------------------------------|-------|
| 1. 糖尿病といわれたら・・・・・・・・・・ | 静岡県糖尿病協会会長 | 田中 彰 |
| 2. 糖尿病の基本知識と漢方・・・・・・・・ | 加藤内科医院（榛原郡吉田町） | 加藤 寿夫 |
| 3. 『消渴』に使う漢方薬・・・・・・・・・・ | 静岡県立大学薬学部客員共同研究員
（中国、浙江省中医薬大学助教授） | 余 勤 |
| 4. 健康の維持増進と薬草・・・・・・・・・・ | 静岡県立大学名誉教授 | 上野 明 |

午後（13：30～）

薬草園見学

第2回 平成13年8月5日（日） —ハーブとアロマセラピー—

午前（9：30～12：15）

- | | | |
|--------------------------|------------------|--------|
| 1. ハーブとバイオテクノロジー・・・・・・・・ | 静岡県立大学薬学部教授 | 野口 博司 |
| 2. アロマセラピーと漢方・・・・・・・・・・ | 山下内科医院（焼津市） | 山下 えり子 |
| 3. ハーブの栽培・・・・・・・・・・ | 静岡県立大学薬学部客員共同研究員 | 宮本 秀人 |

午後（13：30～）

薬草園見学

第3回 平成13年9月30日（日） —伝統医学の不思議—

午前（9：30～12：30） *各自、『日本手拭い』を持参下さい。

- | | | |
|-------------------------|--------------|-------|
| 1. 『つぼ』刺激の効用・・・・・・・・・・ | (株)ツムラ教育研修課 | 大武 光 |
| 2. 薬草よもやま話・・・・・・・・・・ | 神戸学院大学名誉教授 | 斉木 保久 |
| 3. インターネットで見える世界の薬草園・・・ | 静岡県立大学薬学部助教授 | 宮原 武恒 |

午後（13：30～）

薬草園見学

【お問い合わせ先】 県立大学薬学部漢方薬研究施設
(054) 264-5761・5762

【共 催】 県立大学薬草園・県立大学薬学部漢方薬研究施設・(株)ツムラ静岡営業所

薬学部の動き

薬学部長 鈴木康夫

本学薬学部は、この4月で、昭和62年（1987年）4月に前身の県立静岡薬科大学「昭和28年（1954年）開学」から移行して、15年目に入りました。静岡薬科大学は、さらにさかのぼれば、大正5年（1916年）に創立された私立静岡女子薬学校（設立者・校長：医師、岩崎照吉）に源を発しており、数えて、86年目に入った訳であります。卒業生、大学院終了生は合わせて6、500人を超えています。私どもとしてはさらなる発展を期さなくてはなりません。今年も新たに、141名（男子62人、女子79人）の学部新入生を迎えました。

ここ数年間の、我が国の薬学教育・研究を取り巻く環境は大きく様変わりしつつあります。平成4年に医療法の改正が行われ、薬剤師は、医師、看護婦とともに「医療の担い手」であることが明記されました。また、平成8年には、薬剤師法の改正により、薬剤師に「薬剤の適正使用のための必要な情報の提供」が義務付けられました。つまり、薬学教育のなかで、より臨床に近い「医療薬学教育」の充実が欠かせない条件となってきたと言えます。平成11年5月には、薬学6年間教育や学部・大学院における医療薬学研修の充実、学部卒業生・大学院修了者の医療現場でのニーズ拡大方策などを検討する「薬剤師養成問題懇談会」（厚生労働省、文部科学省、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、国公立薬学部長（院長、科長、学長）会議、日本私立薬科大学協会の6者からなる）が発足し、現在は、全国の国公立大学薬学部・薬科大学間共通のコアカリキュラムの検討、さらに実施を目指した動きが活発化しております。医学および歯学教育に置いては、既に昨年度、全国共通のコアカリキュラムの提示が出されました。本学薬学部も、平成8年（1996年）に、医療薬学系2講座、1研究室を新設、さらに平成11年

度の学部入学生から、新カリキュラムへと移行し、3週間の病院実習（県内40病院と連携）、1週間の調剤薬局実習（県内274薬局と連携）、合計4週間の実務実習を必修としています。さらに、平成11年7月には、本学の新大学院構想整備検討委員会に「医療薬学専攻」の設置を提出し、この5月の大学経営会議および評議会でこの設置協議書の文部科学省への提出が認められました。この構想は、現在の大学院博士前期（修士）課程および後期課程を成す薬学専攻、製薬学専攻に加えて、医療薬学専攻（修士、博士課程）を新たに設けるものです。本専攻の特徴として、1）大学院薬剤師実務研修（6ヶ月間）の充実、2）県内の薬剤師の学位取得を可能とする社会人の入学受け入れ、さらには、3）連携大学院構想を視野に入れた教育システムの構築などが挙げられます。もし、文部科学省からの設置許可が得ますと、平成14年4月に開学となり、本格的に「医療薬学教育が出来る大学」として新たな展開が期待できます。

本薬学部では、入試改革にも力を入れており、既に、平成12年度入試からセンター試験の成績の傾斜配点により、数学および外国語（英語）がより得意な学生を選抜可能として来ましたが、これに加えて、平成14年度の一般選抜から、化学、物理を必修にする事に致しました。さらに、現在の県内からの推薦入試枠30名に加えて、全国枠の推薦入試も導入（薬学科3人、製薬学科3人）することとしました。

昨年度8月以降の薬学部のニュース的な事項を列記します。

静岡県内高校生のための最新薬学体験入学講座を実施（平成12年8月3、4日）：県内高校生30名（1年～3年生）を対象に数グループに分かれ薬学部教員、大学院生の指導のもとに、講義、実験、成果発表を行いました。廣部学長の机上実

験をやりながらの導入講義もあり、大変好評でした。本年度も、この8月に「21世紀の創薬を体験しよう」と題して、高校生の薬学部体験入学を行います。

第9回薬学卒業後教育講座の実施（平成12年10月28日（土））：薬学部および同窓会組織である静薬学友会が主催、日本薬剤師研修センターと共催、県薬剤師会、県病院薬剤師会の後援により行いました。ヒトゲノム解読に深く関わった清水信義教授（慶応大・医）の講演「ヒトゲノム解析の最前線と創薬へのインパクト」および地域医療で活躍している本学の前身、静岡薬科大学出身の鈴木こづえ氏（ケアハウス・レインボー瀬名施設長）による講演「介護保険制度と薬剤師」を行いました。今年度も、第10回卒業後教育講座を開催します（10月20日（土）、テーマ：「21世紀の医療薬学と薬剤師の役割」を企画）。

ようこそ！先輩プログラム：薬学部および静岡薬科大学時代の卒業生を招待し、在学生とのコミュニケーションを行う企画です。昨年度は、企業、大学、公務員、病院などで活躍する卒業生を5名招待し、講演会、交流会を行いました。卒業生は熱心に語りかけ、在学生は有意義に受け止めていました。

今年度予定されている薬学部および薬学部が関わる全学的行事として**第6回静岡健康・長寿学術フォーラム**

「ゲノム創薬と21世紀の医療」（公開）の開催「平成13年11月9日（金）、10日（土）」：グランシップにおいて「ゲノムサイエンスの新展開」、「ゲノム研究から新世紀の医療へ」、「ゲノム創薬の戦略」、県民公開シンポジウム「ゲノムと21世紀の医療」などにつき、最先端のフォーラムを開催します。

第5回日中健康科学シンポジウム「平成13年12月5日（火）、6日（水）」：本学と大学間協定を結んでいる浙江省医学科学院との間で2年に1度の割合で開催。今回は本学小講堂で開催予定。これらに加えて、本学創立15周年記念事業の一環として、静岡県立大学開学15周年記念／静岡新聞60年・SBS50年：文化スペシャル～特別公開講座（テーマ「人間といのちーヘルスサイエンス」）、開学15周年記念橋本梧郎氏静岡県立大学・名誉博士号授与記念講演会などの開催が予定されています。

以上、薬学部ではさまざまな活動を通して県民との連携、教育、研究の推進に努力しております。



高校生の薬学体験入学講座の参加者

新入生20人に聞きました

① 県大の第一印象 ② 将来の抱負 ③ ○○にひと言

村田 敏拓 薬学部（大阪府）

- ①山の中にひっそりとたたずむ巨城！もはやそれは大学ではなかった・・・。
- ②様々な分野の内容を最初広く探った上で、自分が特に興味魅かれたことについて、納得がいくまで追求していきたい。
- ③テニスコートにひと言 恥ずかしいのですが、実はクラブ活動をする前に疲れてしまいます。

伏見 友里 薬学部（静岡県）

- ①きれいだと思った。モニュメントがとても不思議で一度上からのぞいてみたいと思いました。
- ②国境なき薬剤師団に入りたいと思います。それはまだわからないけど、人の役に立つことをしていきたいです。
- ③T教授にひと言 分析化学の研究室に入りたいです。またいろいろ教えてください。

薄井 佑香里 薬学部（栃木県）

- ①教室の椅子がおかしい。初めて座ったとき、壊れるのではないかと心配でした。
- ②落ち着いて行動できる人になって、薬学の分野の中でも自分が一番やりたいことを見つけて、それに向かってがんばりたいです。
- ③視力がよくなる方法、知ってる人がいたらおしえてほしいです。

武田 水紀 食品栄養科学部（千葉県）

- ①学生ホール（坂の上）から見える景色がきれい！！入試のとき駅から大学に行く途中に見えた富士山にも感動。
- ②食品と栄養のスペシャリストになります。
- ③おじいちゃんに一言、そろそろお米を送ってください。

宇野 秀一 食品栄養科学部（大阪府）

- ①地味でマイナーでパツとしない。校舎がきれいだから外観だけは良い。
- ②1. 他のみんなより偉い人間になってみんなを見下す。2. お酒に強くなって2度と吐かない。3. たばこはすわない。4. 運転がうまくなる。
- ③便所をきれいにして、クーラーつけて、食堂をもつ

とおいしく作って。

齊能 千夏 食品栄養科学部（清水市）

- ①花がいっぱいでとってもキレイだと思った。タバコくさい。
- ②自分の知りたかったことをとことん分かるまで研究する。ノーベル賞を受賞する！！
- ③一般棟1階にある4本の木、本物だと信じてたのにニセモノ！！だったなんてっつ。

宮島 いさお 食品栄養科学部（静岡県）

- ①入学式の時、部活やサークルの勧誘や、プラスバンドの演奏があり、学校全体が明るく楽しい雰囲気だと感じた。
- ②常に高い目標を掲げ、それを達成できるように努力する。周りの雰囲気や誘惑に流されず、自分の意志をしっかりとち生活する。
- ③キャンパスの電灯に一言 校舎が綺麗なレンガづくりの建物なのに、あの電灯はあまりにも校舎に合っていないと思う。もっとおしゃれな電灯がよかった。

小林 真弓 食品栄養科学部（浜松市）

- ①レンガ造りがとてもきれいで、モニュメントも印象的ですごいと思った。
- ②勉強はもちろんがんばり、部活にも精一杯取り組み、充実した大学生活を送りたい。
- ③上り坂がたくさんあって大変です。

河原崎 志保乃 食品栄養科学部（静岡県）

- ①校舎はきれいだけど、とにかく坂がキツイ。
- ②とりあえず皆出席。
- ③カレッジホールは禁煙にしてほしい。

佐々木 司 薬学部（北海道）

- ①小さくて可愛い学校だと思った。ナナメってるのが微妙だと思った。超だもんで。
- ②2年後無事3年生に進級、成績の大半は可。その後あんなこんなで院生になり、新薬で一発当てる。老後はワイハに別荘を買い、アグに余生を過ごす。（でじ）
- ③ポーターなシャネラーへ 君 頑張りすぎ。超だもんで。

李 賢美 国際関係学部（韓国）

- ①れんが作りでとてもきれいな印象でした。緑がいっぱいでとてもいい環境の中にある大学だと思いました。今も季節おりおりの緑を楽しんでいます。
- ②今、国際関係学科で、国際的政治や経済、法律を学んでいますが、この知識を生かして、国際組織（例えば国連）などで働きたいと思います。また、もっと頑張って大学院を目指したいと思いますが、それが将来、国際組織(機関)に就くことに役に立てるようにしたいと思います。

アンキー クルフィアンティ

国際関係学部（インドネシア）

- ①県大はとてもきれいな大学だと思います。みどりもいっぱいあって、とてもすずしいです。勉強するためには一番いいところだと思います。
- ②今、国際関係言語文化学科で勉強していますが、卒業したら、インドネシアへ帰り、今まで日本で学んだことを多くのインドネシア人に役立つように今から協力したいと思います。

箕輪 菜穂 薬学部（茨城県）

- ①受験のとき、初めて県大に来てレンガ造りのスゴク綺麗な学校でビックリした。
- ②薬学の知識はもちろんだけど、視野の狭い人間にならないようにいろんな知識を広く浅く身につけて、キャパの広い人になりたい。
- ③大学を設計した人へ なぜ大学が山の斜面に建ってるんですか？ツライです。

中磯 愛 薬学部（山口県）

- ①受験のとき初めて校舎をみたときは、とてもきれいで、とても感動して、絶対ココに来たいと思った。
- ②少しでも薬などについての疑問があれば、気軽に声をかけてもらえるような薬剤師になりたい。そのために、大学ではいろいろな経験をしたい。
- ③K先生に一言。黒板早く消しすぎで、いつもノートにうつしとれません。声が小さくて聞こえません。

鈴木 翔 食品栄養科学部（焼津市）

- ①校舎がきれい！坂を隔てて線対称できれい。草薙駅からのぼりっぱなしがきつい。夜になるとモニュメントがシブく光る！
- ②毎日一限からで大変だけどしっかり学位をとりたい。正門から上食堂まで歩いて毎回声をかけられるくらい友達を作りたい
- ③下食堂混みすぎ！すわれません！雨でも学校中移動できるのいいすね

長田 正経 国際関係学部（藤枝市）

- ①すごく綺麗だけど、階段の仕組みがめんどくさい。
- ②しっかり単位を取って、4年で卒業する。言語力を生かせるような職に就きたい。
- ③木曜一限、全学共通情報と数理A「情報リテラシ」のS先生！マイク遠すぎです！もっと口に近づけて話して下さい。

手塚 和旨 経営情報学部（御殿場市）

- ①建物のレンガが西洋風なので、キャンパス内を歩くと心が落ち着く感じがします。校舎と、キャンパス内から見える景色がきれいです。
- ②IT技術がどんどん進化している今、世の中には、膨大な量の情報がある。そんな情報を見抜き、使いこなせる力を県大で養っていききたい。
- ③両親にひと言：ごめんなさい！もう限界です。仕送りして下さい。大学生には、やりたい事が沢山あるので・・・。

鈴木 享美 看護学部（浜松市）

- ①環境がよく（みどりが多い）、レンガ造りの棟が外国のキャンパスを思わせて、とても素敵だと感じました。
- ②多くの看護知識及び技術を学び、外国語をマスターして、外国人の患者さんにも安心してもらえるような看護婦になりたいです。
- ③留学生の方にひと言、もしよろしければ私に皆さんの国のことばを教えてください。

石川 夏江 看護学部（神奈川県）

- ①赤レンガ作りの校舎で、新しくきれいで明るい。自然に囲まれた勉強するのに適している。学生は親切で明るく授業や課外活動に熱心。穏やかだが意見をしっかり持っている。
- ②大学で看護分野に関わらず物事を考える姿勢を身に付けたい。編入したときの初心を忘れずに、何にでも積極的に取り組んで、自分のものにしていきたい。今学んでいる国際保健学や地域看護学の分野に興味があるので、将来はそのような看護分野に携わりたい。
- ③編入前の専門学校で先生方へ、大学生活にも少しずつ慣れてきました。学校で学んだことを基に、さらに知識を深め、考える力を身につけたいです。

北山 智章 薬学部（奈良県）

- ①初めて見たときは、ここに来たいと思うほどきれいに感じた。ただ、坂がしんどい。
- ②とりあえず無事に進級し、卒業し、国家試験に受かる。その後、製薬会社で研究し、新薬で一発ドカンと当てて、歴史に名を残したい。
- ③～学長にひと言～ もう少し大規模の売店、もしくは大学生協を作ってください！

“はばたき寄金” からののお知らせ

I 平成12年度はばたき寄金事業・収支結果報告

1. 事業結果

(1) 奨学金の授与

フィリピン大学及びモスクワ国立国際関係大学短期交換留学生（派遣学生3人、受入学生6人）に奨学金を授与した。

(2) 文芸コンクール・スピーチコンテストの実施

第4回文芸コンクール（7月～10月）及び第3回学生スピーチコンテスト（11月3日）を実施した。

(3) はばたき賞の授与

海外で開催された学会で優れた研究発表を行った大学院生、視覚障害者のための情報技術の研究結果が評価され通商産業大臣表彰を受けた教員、国際的なボランティア活動を行った学生等に「はばたき賞」を授与した。受賞者総数14人

※上記の事業内容の詳細は、静岡県立大学はばたき寄金のホームページをご覧ください。

2. 収支結果

○収入 5,356,743円

内訳 前年度繰越金 4,035,270円
 寄付金 1,327,959円（教職員32件 その他6件）
 雑収入 2,514円（預貯金利息）

○支出 1,385,745円

内訳 報奨等 1,321,000円
 雑費（賞状筆耕代等） 64,745円

○差引残高 3,979,998円（平成13年度へ繰り越し）

II 平成13年度事業実施状況（5月末まで）

・短期交換留学生に対する奨学金の授与

モスクワ国立国際関係大学への短期交換留学生（派遣）、国際関係学部4年近藤真奈美さんに対し、4月27日、廣部学長から奨学金を授与した。



近藤さんへの奨学支援金授与

5月末寄金残高 4,070,057円

[4月以降の寄金者（50音順 敬称略）] 寄付金総額（6件）14万

小園伊太郎（食品栄養科学部） 貝沼やす子（食品栄養科学部） 木村良平（薬学部）

白木まさ子（食品栄養科学部） 匿名希望者2名（国際関係学部、食品栄養科学部各1名）

（担当 事務局経営課企画スタッフ Tel.5103）

「日本平留学生寄金」入学祝金贈呈式

日本平留学生基金（代表イトウ秀雄氏）は5月23日、本学へ今年入学した留学生10名（国際関係学部8名、経営情報学部2名）に入学祝金を贈呈した。

日本平留学生基金は、県内に留学する主として東南アジアの大学生に金銭的援助を行うことを目的として、平成8年1月、イトウ秀雄氏により設立された基金で、今年で6年目を迎える。イトウ氏の基金募集の趣旨に賛同した協力者は400を超える個人・団体にのぼる。入学祝金は、学部は今春入学した留学生全員に一時金として1万円が支給される。

贈呈式でイトウ代表は「皆さんの目のかがやきをいつまでもなくさないよう是非、目標を達成し、勉強、友人づくりに励んで欲しいと」挨拶し、祝金を留学生一人一人に手渡した。

留学生を代表して、国際関係学部の濤利さんが「私達留学生は様々な夢を持っています。その夢を果たすために一生懸命頑張ります。また多くの方々から優しく、温かく見守っていただき感謝しています。私達はその期待に応えるためにも日々努力します。」と感謝の言葉を述べた。



受賞

薬学部医薬生命化学教室の武田厚司助教授が第21回薬学研究奨励財団研究助成金を受賞した。研究課題は「脳神経系における遷移金属の動態と作用解析」である。本助成金はわが国自然科学、特に薬学および関連諸分野の発展に多大の貢献が期待される研究者に贈呈されるものである。贈呈式は平成13年3月末に行われた薬学会年会に先立ち札幌にて挙行された。

川俣君 準優勝！

5月3日、静岡大学で開催された第18回静岡県大学高専柔道春季優勝大会において、80kg超級クラスの個人戦に出場した川俣幸一君（大学院生活健康科学研究科 人体生理学研究室 博士2年）が見事に準優勝しました。今後のより一層の活躍を期待しましょう。



「みどりの交流会」

経営情報学部経営情報学科4年 伊藤 志興

平成13年4月28日経情棟にて第2回「みどりの交流会」が行われました。この交流会は、経営情報学部内の交流を深めようという、目的で行われるイベントであり、学部長の小林みどり先生の名前と祝日のみどりの日にちなんで命名されたものです。

豪華景品が当たるといふ触れ込みと、みどりの交流会運営スタッフの懸命の広報活動により、参加者数は学部生、教員、OB合わせて昨年を上回る97名となりました。参加者はまずランダムに10個のテーブルに振り分けられました。他学年の学生や先生、OBが一つのテーブルに座ることになり、最初のうち、入学して間もない一年生はやや緊張した顔つきでした。

式の初めに、オープニングセレモニーとして学部長の小林みどり先生から「みんなの力を合わせて県立大学経営情報学部を日本一の学部にしましょう」という言葉をいただきました。このような気持ちをもって本学で働いている先生がいることに私たちは大変勇気付けられました。

次に湯瀬ゼミ主催の「一般常識クイズ」が行われました。これは一つの質問に対する答えを、各グループごとに考え、一番多くのグループが考えた答えと一致した答えを出したグループに得点が加算されるというゲームです。例えば「スパゲティといえば何？」との質問に「ペペロンチーノ」と答えたグループが1つ、「カルボナーラ」と答えたグループが3つ、「ミートソース」と答えたグループが6つであった場合には「ミートソース」と答えたグループに得点が加算されます。

質問は「ヒーローといえば誰?」、「おいしいお茶の名前といえば何?」などバラエティに富んだものでした。中には「経営情報学部の先生方で怖そうな先生方は誰?」という際どい質問も出され、参加者の頭を悩ませていました。クイズが進行するにつれ各テーブルの会話も盛り上がるようになり、学生、先生ともども世代間のギャップを痛感しながら答えを熱心に考えていました。10問の問題が出題されたのですが、前問正解のグループの2チームに図書券が贈呈されました。

一般常識クイズに続いて、「経情ウルトラクイズ」が北大路ゼミ主催で行われました。これはい

わゆる〇×クイズで、「経営情報学部棟で一番広い教室は4316教室である。〇か×か?」、「経営情報学部棟にはシャワー室がある。〇か×か?」、「経営情報学部には4年生だけで10人を超える大所帯のゼミがある。〇か×か?」など、経営情報学部に関係する問題が出されました。経営情報学部に通じていなければ答えられないような質問が多かったのですが、正解者が多く勝ち残り、参加者の学部に対する思い入れを垣間見たような気がしました。

20問ほどの問題を出して勝ち残った優勝者はなんと、入学して間もない1年生の手塚和旨君となりました。優勝者、正解多数者には商品が渡されました。

クイズも終わって一段楽したあと、懇談会となりました。食べ物と飲み物が用意され、運営に全面的に協力していただいたAVL委員会のBGMのもと、和やかな話し合いが行われました。同じ学部内であっても普段話す機会のない人は多いものです。テーブルをランダムに振り分けたこともあり、交流会が始まってすぐの段階では緊張していた参加者も、会が進行するにつれ打ち解けてきて、他学年の学生や先生方と話している場面も多く見受けられ、先生方の授業のときに見せる姿とはまた一味違った一面を見ることができました。

30分間ほどの懇談会のあと、最後はお約束の北大路先生のリードによる「経情一本締め」が行われ交流会は終了となりました。わずか2時間ほどの交流会でしたが、他の学生、OB、先生方など学部内のさまざまな人との交流がなされ、大成功の交流会となりました。



●●● 図書館だより ●●●

新着情報

第7代新館長プロフィール

氏名 西垣 克 (にしがき まさる)
学部 看護学部・教授
出身地 大阪市
血液型 A型
趣味 アウトドア、日曜大工、料理
主な著書 『医療学序論』 (篠原出版)
『調査と研究』 (学研)
『健康管理概論』 (光生館)

館長☆おすすめ本

『失敗の本質』 著者 野中郁次郎 他
(ダイヤモンド社、中央公論社)

学生へひとこと

のびやかに、
おおらかな学生生活を



Information

図書館は土曜日も開館しています

午前9時から午後5時まで
授業のある期間に限ります。
既に多くの学生さんが利用しています。

カラー複写機を設置しました

1階コピーコーナーにカラー・モノクロ
両用機があります。カラーは1枚50円。

欲しい本が借りられません!

学 生 先生に「読みなさい。」と言われた本
を探したんだけど、貸出中で、もう返
却期限も過ぎているんです。早く読み
たいのですが…。

図書館員 借りている人に催促しますので、予約
申込票に記入してください。本が返却
されたら、入館ゲートの掲示板に「予
約図書があります」と、貼り出します
ので注意して下さい。

*早速借りている人を調べて連絡しようと電話し
ましたが、「お客様がおかけになった電話番号は
現在使われておりません」とのことで、連絡がと
れず、間に合いませんでした。

みんなが必要なときに手にするために、 本の返却期限を守りましょう!

=電子ジャーナルを利用してみましたか?= =

図書館のホームページで、現在購読中の雑誌の中で電子版にアクセスできるものを紹介してい
ます。利用できるのは、約80タイトルで、学内のパソコンからリスト上のタイトルをクリックする
と、その雑誌のWebサイトにジャンプします。

また、平成13年度から、OUP刊行の電子ジャーナルの試験提供が始まりました。これは、国立情
報学研究所とOxford University Press (OUP) 社との共同事業で提供されているものです。OUPの雑誌
には、生命科学・医学・経済学・法学など、幅広い分野の雑誌が含まれています。こちらも、ホーム
ページから同様に利用することができます。

まだ、利用したことのない方、是非、一度、試してみてください。

隠れた偉人・杉山源作博士

杉山源作博士といっても、いまその名前を知る人はいない。兄の杉山彦三郎は、『やぶきた茶』生みの親として有名であるが、その実弟である。源作氏は当時の有度郡中吉田村（現在の静岡市中吉田）十二番地に醸造業杉山源左工門の次男として万延元年（1860）に生まれている。明治維新の八年前だ。いまも『杉山酒店』がある。

明治十二年、大学南校（東京帝大の前身）に入学し、卒業後静岡で開業。研究心を抑えがたく、明治二十三年に30歳でベルリンの医科大学に入り、二十七年に卒業し、『ドグトル・メジチーネ（医学博士）』の称号を授与された。同大付属病院に十二年勤務したが、『日露戦争』で中立国ドイツに収容されていた日本人捕虜の送還と防疫業務に従事し、三十九年に帰国した。勲六等瑞宝章を下賜されたのは、このときの功績によるものである。

郷里のために奨学金

たまたま帰国途中の船に乗り合わせた『南洋の王様』の治療をしたため、請われてその南洋王室の侍従医となった。この決定に兄彦三郎は反対したが、南洋との関係を重視していた小村寿太郎外相のたつての頼みによるものであったという。

三年の契約期間終了後、静岡市紺屋町、のち東京に移り神田淡路町で開業し、大正二年（1912）東京で病没した。54歳。郷里中吉田の『普濟寺』

谷田風土記

に葬られたが、のちに国吉田の養鶏業山本彦次郎氏が実父にあてた源作氏からの手紙を見つけ、60年ぶりに源作氏の墓を掘りおこしたところ、『是はこれ勲六等ドクトル、メジチーネ杉山源作の遺骸なり、掘り賜わば、燐みて埋めたまえ。』という石碑が出てきたという。源作氏は生前から郷里中吉田一帯の児童のために奨学金を贈呈し続け、戦後もその基金は続けられたが、のちに中吉田公民館設立資金に充てられたという。

その後、杉山家は墓地を整理し、現在彦三郎・源作両氏の墓は、桃原寺に移っている。

いずれにしても、県立大学のすぐ近くに、こうした『隠れた偉人』がいたことを広く世に出したいものである。そのことを郷土史家小林隆二氏（中吉田）がいまも研究なさっているのも嬉しいことである。

（国際関係学部教授・高木 桂蔵）



写真は普濟寺、右は県立美術館・県立大学前駅

学内ニュース「はばたき」への掲載について

教職員・学生の新刊案内、各種の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の開催などの教職員、学生関係のニュースや投稿を歓迎します。

掲載希望がありましたら、事務局経営課・企画スタッフ（管理棟2階）あてに原稿をお寄せください。

E-mail : kijo4@gm.u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集 静岡県立大学広報委員会 TEL.054-264-5103

静岡県立大学ホームページアドレス



<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>